郷土室だより

第25号

昭和54年9月30日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 543－9025

切絵図考証 一二

安藤菊二

第17 築地五丁目

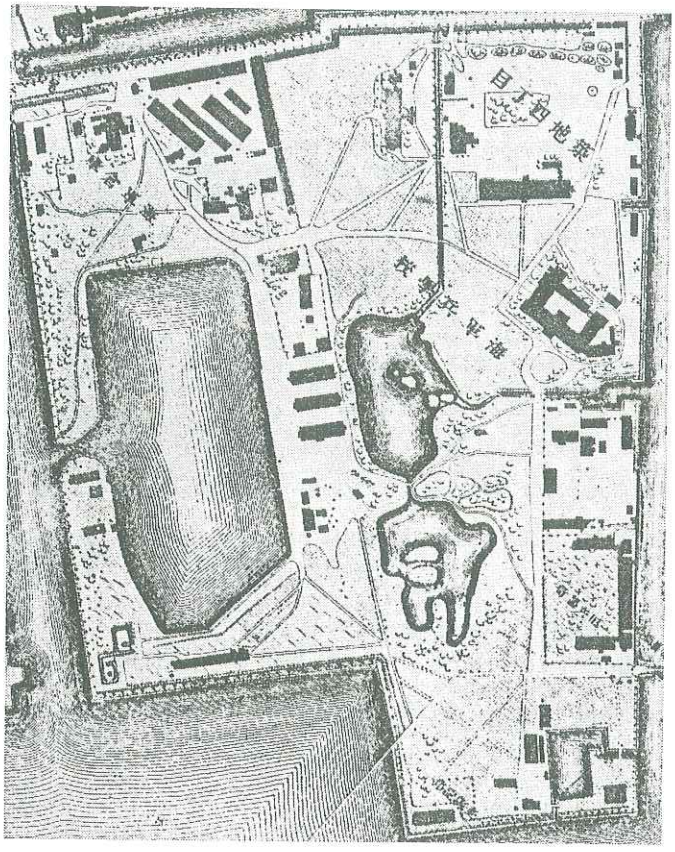
○浴恩園

現在の東京都中央卸売市場の西部過半の地は、昔、松平定信の別業「浴恩園」のあった所として知られ、東京都の史蹟として指定されていることは人の知るところである。

この「浴恩園」について、区史に記す所は充分でないが、数年前複刊された『風俗画報』の、第一三号から第一六号（明治二十三年）にかけて、小沢酔園氏が、楽翁公が自身記された「浴恩園記」を紹介しておられるのに気がついた。

文章が、今日のわれわれには聞きなれない雅文で記されているが、詳細な記述がなされており、同園を知るうえにおいて貴重な資料であると思われるので、この機会に紹介し、区史の欠けたるを補っておきたい。

なお、紹介にあたっては、句読点を付すなど、読みやすくするようこころがけた。



明治17年測量　参謀本部実測図

○浴恩園ノ沿革ヲ記ス　小沢圭二郎

浴恩園ハ白河少将楽翁公ノ菟裘（トキウ）ニシテ築地東南ノ海隅ニ在リ。此園ハ寛永年間稲葉侯（閣老美濃守正則朝臣相州小田原城主）ノ創（ハジ）メテ築造セラレタル所ニシテ、世ニ聞エタル勝境ナリシガ（江戸名所図絵築地ノ部ニ往時稲葉侯別邸ニテ江山風月楼ノ勝概アリシヲ略記シタリ）後ニ（年月未詳）一橋家（幕府三郷）ノ鷹場トナリテ大ニ荒蕪シタリシヲ、寛政四年幕府ヨリ公ノ下弟（シモヤシキ）ニ賜ハリケレバ、公其恩波ニ沐浴スルノ意ヲ表シテ浴恩園ト名付ケラレタリ。

公ノ倹素ナル未タ曽（カツ）テ鉅費（トモヒ）ヲ抛（ナゲウ）テ苑（エン）囿（ユウ）ヲ作ルノ挙ハ之アラザルモ、其天禀（テンリン）ノ心匠ヲ以テ夙（クワツ）ニ後年ノ計画ヲ定メ、徐々樹苗ヲ補植シ、漸々池塘（チトウ）ヲ改修シ致仕ノ後ハ玆ニ居住セラレシガ、固（モト）ヨリ安排ノ巧ナル布置ノ宜シキ物、各々其所ヲ得テ年月ヲ経ルニ従ヒ、洵（マコト）ニ天造地設ノ観ヲ呈スルニ至レリ。公親（ミヅカ）ラ五十二勝ノ和名ヲ撰ミ、更ニ儒臣ニ命ジテ其漢名ヲ填（フ）テシメ、一勝毎ニ当時名家ノ詩歌ヲ徴シテ之ヲ小石柱ノ四面

ニ刻シ、名勝各所ニ建設セラレ、復世上ニ名高キ一大苑囿トナレリ。

公卒スルノ年文政己丑ノ春、祝融ノ災ニ罹リ楼館亭榭ハ悉ク烏有ニ帰セシガ、広大ノ園池ナレバ、山林水石等ハ大ナル損傷ヲ蒙ラザリシニ、其後更ニ修治ヲ加ヘテ旧観ノ美ヲ復スルニ至レリ。

余天保壬寅ヲ以テ園ノ東隅ノ廨舎ニ生レ、十歳左右ニハ屢々園中ニ遊戯シテ山水ノ勝槩ヲ記臆セリ。明治維新ノ後近隣大小ノ諸邸ヲ併セテ兵部省ノ所轄地トナリ、海軍兵学寮ヲ茲ニ創立セラレタリ。四年辛未ノ冬、余初メテ兵部省ニ出仕シ、海軍兵学寮教官ヲ承乏セシニ因リ、教授ノ余暇再ビ園池ノ旧蹟ヲ彷徨シタルニ、既ニ尽ク毀撤シ去テ、唯鬱然タル大地ノ残痕ト突乎タル秀峯ノ剰形ヲ存セルノミ。俯仰今昔ノ感言フニ勝ユベカラズ。嗚呼古人夢梁ノ録アルハ余其偶然ニ非ザルヲ知ルナリ。

○楽翁公自撰浴恩の記

浦わの翁の住める里は築地といふ西の方に柴門あり。聊の廊あり。廊の簀子に妻戸あり。茲より入ぬれば円かなる額に楽の一字を附たり。其内は翁のはや起臥する所なりとぞ。夫を千秋館といひて輪王寺親王額かい給ふとかいふ。西の方にいとささやかなる間ありこれを日新蔀といふ。千秋館は南おもて、蔀妻戸設けぬ。東の方は養気室と名づく。其庇より続きたる小室の表に清風明月の額かけ、内には風月の二字水月君かい給ふを、最上川の埋木につけたり。上には翁が昔より見し山河の景色をかかせて張り、其額に「処々青山是故人」とかいふ句を阿波の拾遺かい給ふ。又其続きに一楽の文字かいたるあり。

千秋の庭は南に池あり。西は盆松などを初としてさま〳〵並べ置て、翁日毎に自ら水など灌ぐとぞ。軒端にいと年老たる松ありて石葦などおひぬ。其傍の梅は名もなきものから清香ことなりしといふ。左の方に桜あり。之を常盤桜といふ。これも此表へ移りし頃植ゑたり。軒に並ぶ許りなりしが年々にいと立伸てけり。此花園の花ちりぬる後も盛を残せば名附しとかや。

軒の下には流れの形ありて白きさざれを敷きたり。玉水の落て流るるも盥石の水をも茲に落さん料とぞ。此流れに石（廣六尺長一丈三尺餘といふ）の大なる橋あり。**千代の岩橋**とかいふ。其下に紫の石あり。こは本邸より移せしなりとぞ。南の簀子より七八間にして芝植えたる所は舞まふ台あり。其向ひは池なり。池の岸は**千年の浜**といふ。池は**春風**を名とす。池の中に松のおかしふ生ひたる嶋二つありて、**名残の島**といふ。一つは名ごりの小島といふ。こは昔塩竈の浦見に往たるおり、曙に松島のほの〴〵と間近きが二つ許り見えしを身にしみて覚えしが、此二つの島見れば必其曙の事思い出すとて名付しとか聞きぬ。

又かの岩橋の傍に柳あり。**衣笠**と名づく。こは六角堂の柳の枝挿したるなり。今は其六角堂の柳は枯失て茲に残れるもおかしきと都人はいふとやらん聞きぬ。ここに門あり。橋あり。松の大なるが橋を覆へればにや、松濤深処の文字を門に掛ぬ。橋を出づれば**色香の園**にて梅多く植ゑたり。門と橋の間には大痩嶺の梅を（此間蠹蝕して読むべからず）小倉の楓真垣の竹とを植ゑぬ。まがきの竹とは芍薬の傍に竹を曲げて多く立置きたるが、いつか根づきて枝葉繁りしなり。珍らしとてここに移したりとききぬ。

かの館の西の方盆玩など並べしあたりにはさま〳〵の蓮を瓶などに植置てけり。茲に露台あり。望嶽といふ。富士は更なり。箱根の山々も、残なふ見ゆ。もと此地は高からねども見渡すあたりに山も森林もなきにや、千秋館の窓よりも坐して富士を見る。江戸の中高き所はあれど楼台ならで富士見る事はいと稀ならんかし。台の下は窖にて冬に堪えざる盆玩を入る設なり。

台の傍に小柴垣引廻したる一つの園あり。石いと多ければ石苑といふ。さま〳〵の石もて畳みて山とし池として作れり。多くの石色も姿もさま〳〵なるを、巧に作上げたるは此翁のしたる事にて、石は皆此園中の池の岸水の中などに埋れ居しなど引揚げたるなり。もと此園は猷廟の頃稲葉濃州の別荘にして、知る所も小田原なりければ夫よりも移し、人よりも競贈りけるの石ことに多し。橋府此邸替へ給ふ折も木石御心の儘に移し給へかしと願ぎたれば多く移し給ひし残なれば、昔こちたきまで石ありしを知るべし。翁ここを我ものにしたるも、かかる名園古跡の木石みづからの物とせず、聊も此園中の中に出さずなん。只此園の中に石五つは翁の物なりと人にもいへば怪しみ笑ふ。そは此石苑に二つは大洲の君の船底に入れし石の不用なるを入れしと。日新蔀の軒の下に白き絲の平らかなる二つは本邸より移せしなり。石苑の中央に瓦を縁にし土盛掛て牡丹を植う。

石山の下池を隔てて畳二つ余り敷くべき石の上に亭を設けて、露盤に涼風の字あり。げに木立しげりて夏もここに来りぬれば冷かにぞ覚ゆる。其山の上に堂あり。もと田安の姫君ここに移り給ひたるがとみにやまふにて身まか

り給ひしを、あかず名残思ひて地蔵尊一軀を作り安置し、三年が中日毎に詣でけり。三年過ぎて其像をば深川の寺に納めぬ。其堂も用なかりしを、北の方ひたすらに請ひ給ひて日蓮の像を置給ひて、今は妙華堂とかいふ。

山の下門あり。大なる卯木の二つ三つあればにや**うつ木の関**となんいふ。此関を越ゆれば左は池右は桜の並木にてきぬ桜といふもここにあり。遅ざくらにて色の殊なれば常盤と共に愛る木なり。茲に亭あり。浸月の額を小田原の君かき、繞花のは村上の君書き給ふ。二つを併せて**花月亭**といふ。実に花の梢を見るは此処なりけり。寒山の山にある桜ことに高けれども、余所の梢に隠れてよそよりは見えず。茲にては夫も残なふ見ゆ。又月も東山より出るを先茲に見る。池の漣漪に映るのみかは、**春風の池**をたてざまに**白鷺の橋**まで見ゆれば、ことに広らにて島々の浮べるさまもおかし。

亭の左の方に大いなる松、池に臨めり。又いと大きなる石あり。青きが中に白き筋ありて、昔より礬噲石一丈許り余といふとかいふ。高く聳えて立るに芭蕉少し茂りて繞そひたるよし。此石をかくいふはいかなる由も知らず。或人のいふ。此石はいと大きなれば門くづして園へ入れしよりともいふ。

石は右にて左は池なり。山吹・雪毬花など春は咲交れり。右の芭蕉には又桜ぞつづける。木の下は菊を植えぬ。茲に又関あり。**葉山の関**といふ。竹いと茂りて小闇らし。夫を遶りて出れば亭あり。枕流といふ。此亭の前に澗水の流れしが今は絶えたれど、其跡は残れり。此あたり棕梠多くて唐めきたり。之より遥々の池の岸を廻る。左右皆桜にて山吹木の下に茂り藁吾は岸辺にあり。行先の山も尾も茂れるぞ多き。又薊かずぐあり。彼濃州むかし蒐めしとかいふ。此道を総て**花の下道**といふ。

行尽せば、右の方に道ありて馬場へ行。夫をもよそにしてゆけば、大きなる松の二もとありて板橋を渡る。茲に**桜の淵**とてさま〳〵の石を集めし所あり。其上に峯の桟橋ともいふべき柴橋の高く掛れるを、**花のかけ橋**といふ。是より見れば向ひは**春風館**なり。斜に見ればかの**花月亭**なり。島々見ゆるもおかし。

橋をつくせば又右に坂あり。左は浜辺にて、山際躑躅山吹の類多し。もと桜はすべて枝を並れば皆花をもて名とす。此浜辺を**しのゝめの浦**といふは、**有明の浦**より曙の頃見ればここらの藤の花うちかすみて、横雲の棚引やうに見ゆれば名づけしとかいふ。又初の右にある坂を登れば、木曽箱根ともいふべき険しき道の竹の林の中にあるを、竹を力に登り降る道を、**竹の細道**といふ。

夫より**月とふ里**といふあり。嘯月廬といふ馬場の亭、幽篁の中にありて、馬場は七八十間許りにて東に鳥銃習ふ処あり。左右石にて畳み、銃丸の余所へ行かざる様に作りしものなり。馬場の左右は櫨の木うゑて、下には宇治の茶をうゑたり。此里より竹の中を暫く行けば**秋風池**の向なる**紅葉の下道**へ出るとなり。**月とふ里**のあたりに石碑ありて、初の句は忘れたれど、春風秋の風、吹らん末の袖もゆかしきといふにて、季氏の園よりも高しといふ人もありとや。

又此里をば問はで浜辺の方を行ば、山の上に遊仙亭といふあり。もとは宇治の鳳凰堂をひゐなの屋のやうにささやかに造れりしを入れたりしが、潮風断えず吹けば其堂なども破損すればにや、大塚のまがり所へ移して今は布袋を安置したり。此山を**高岡山**といふは鳳凰堂ありしよりつけしにやあらん。**高岡山**の続きの高き山は昔より風打山といふ。海より吹風を茲にて折きとむるとの心にや。山の形烏帽子の様に昔はありやしけむ。今はさも見えず。うち登れば風神など祭れる社あり。立田山の心とも見えず。されど山の後は紅葉打茂り、前は桜ことに多し。

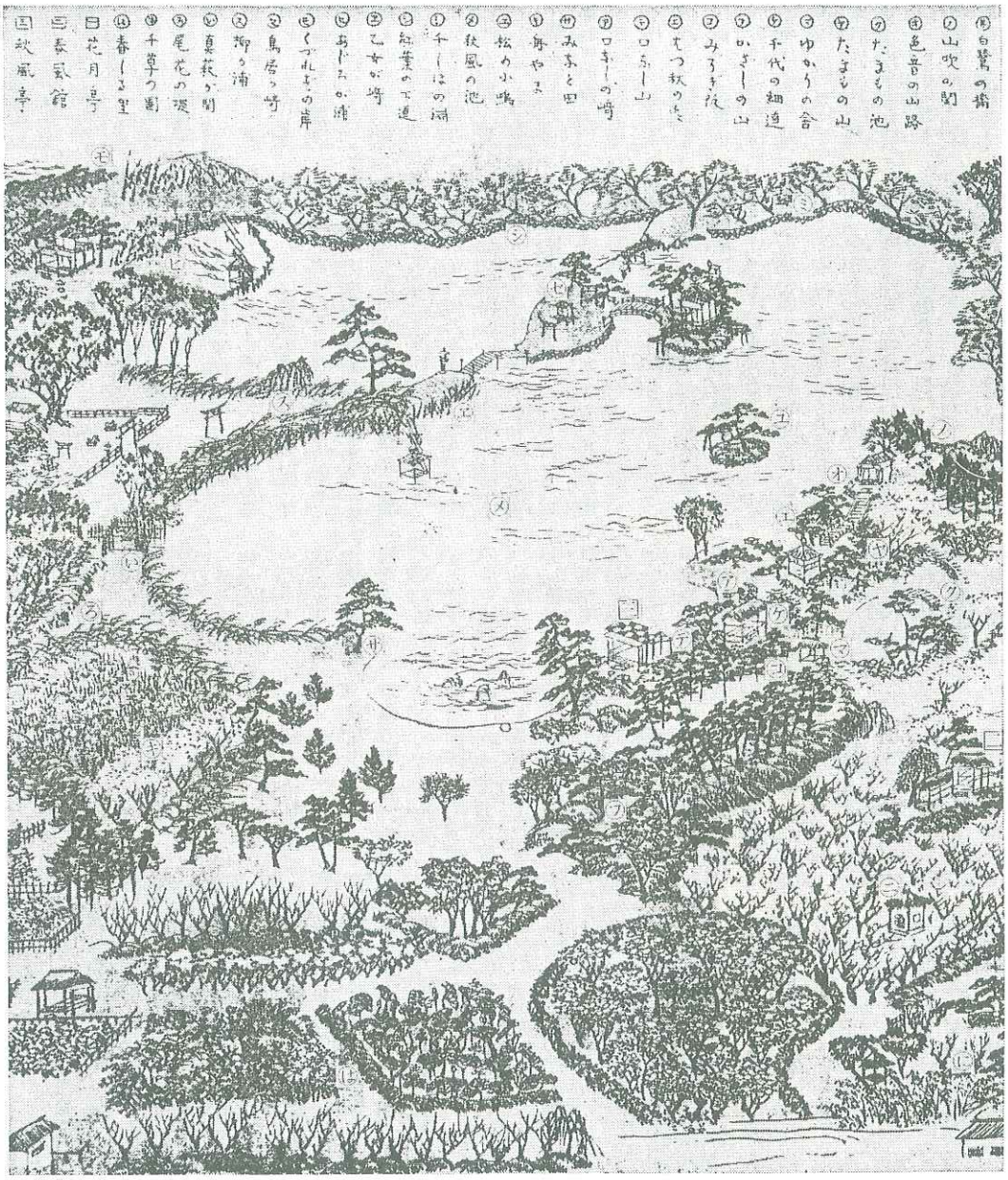
南の麓は**月問ふ里**なり。山上山王の林なども青うくまどりたる様に見ゆるなり。其山々の麓なる浜辺をゆけば橋あり。こは春風秋風の二つの池の連れば二水などとかいひけんによりしや。橋をも**白鷺**とよぶ。其橋を渡りて**春風館**の方へ出で、左の険しき山道を行ければ、山吹・萩など茂りたる細道にて**色音の道**とかいふとぞ。其坂は秋風の庭へ出る間道なり。其小道よりせざる輩は感応山の麓につづき、春風の柳の屋の庭に行くめり。又た其橋を渡らで高岡の東の麓をゆけば、楓いと多くて**紅葉の下道**といふ。此道いと長し。左は竹の林、右秋風の池なり。

半行くあたりに、芝橋ありて島へ渡る。茲に弁天を安置す。橋府邸の時に変らず邸の尊像なり。其島の西北に小嶋あり。**松の小嶋**といふ。又此弁天の嶋より東へ出し崎を**乙女が崎**といふ。細く一筋に池に出たる道なり。向ひは稲荷の社なり。又夫よりも細き道の出しを**鳥居が崎**といふ。昔堤ありし所の大なる松、今も塚のごとく高き上に生ひそひぬ。茲に小亭あり。操琴居蘇といふ。此崎に内に流穿ちて潮いと満ぬれば、茲より流出る音と松とを合せて名づけしが、後に柴橋出来てよりは、させることなけれども、松風の調べと

浴恩園全図

㋑千年の浜
㋺千代の岩橋
㋩衣笠柳
㋥色香のその
㋭有明の浦
㋬八声の橋
㋣常盤嶋
㋠千代の長橋
㋡かきは嶋
㋢鴫の通ひ路
㋣にしき嶋
㋤名残の嶋
㋥春風の池
㋦さゝなみの谷
㋧宇つ木の関
㋨月まつ浦
㋩葉山の関
㋪花の下道
㋫桜の淵
㋬花のかけ橋
㋭竹の細道
㋮月とふ里
㋯東雲の浦
㋰たか岡山

㋐白鷺の橋
㋑山吹の関
㋒色音の山路
㋓たまもの池
㋔たまもの山
㋕ゆかりの舎
㋖千代の細道
㋗かこしの山
㋘みそぎ阪
㋙はつ秋の森
㋚口なし山
㋛口なしの崎
㋜みなと田
㋝舟やま
㋞松の小嶋
㋟秋風の池
㋠千しはの淵
㋡紅葉の下道
㋢乙女か崎
㋣あじろが浦
㋤くずれずの岸
㋥鳥居か崎
㋦柳か浦
㋧真萩が関
㋨尾花の堤
㋩千草の園
㋪春しる里
㋫花月亭
㋬春風館
㋭秋風亭



のみに今はなりぬる。昔は其堤感応山に続きて、堤より嶋又は石などありて跳越てゆきぬ。今の**秋風の池**のあたりは葭蘆のみ茂りて、池にも非ざりしなり。二つの崎の逢ふ所に橋あり。其橋を渡れば稲荷の社に行く。社も橋府邸の頃より在しがままなり。

夫より池を右にして歩めば、かの網代の床まねびたる屋あり。夫を**あじろの浦**といふ。初の芝橋を渡らで**紅葉の下道**を遥々行きても此処に出るなり。茲より大海の潮此池に通ふ道あり。茲に又山あり。阪をゆけば竹の林にて、孟宗とかいふは、ことに丈高う打なびけり。阪を尽せば小松の浦の海原を見る。いはば宇治のあじろを見つつ山里問んと思ふが、おもはず浦わへ出でし心地すめり。茲をなん**崩れずの岸**といふ。昔あまたたび高潮の打来て崩せしより、石などもて岸をも作りければ名づけしなるべし。茲に亭あり。蓬瀛をもて林の君名付しなり。福山の君書きて彫りしは松浦静山翁なりけり。茲は常に亭と思ひて此間蠹蝕などのひまより見れば高楼の上なり。いかにと問へば、過し頃**秋風の池**のいと埋れにければ其土を堀取てもせん方なく、皆茲にもて来たり。崩れずの堤も一つの山となしなばいとど堅からんとて置ままに、楼の下の方は皆埋みて道は高楼の上に打続く様になれり。されど楼の南西はかく埋みて北東の方は土盛らざれば、下より見れば常の楼なり。これも一つの見る目となす。下は竹生茂りて七つの何とかいふ人の遊ぶべき処なめりといふ許りなり。

これより竹の林を行けば、又堤ありてさま〳〵の名ある竹ゑたり。左に見つつ行けば**眞萩の関**なり。稲荷の社の前の方より行きても此関ぢに出るなり。此関は萩あるをもて名とせり。其関を踰えて左の方へ行けば、**尾花の堤**とて左右に尾花打茂りて分わぶる許りなり。尾花の中に小高き山あり。船の形したれば**船山**といふ。今は其山聊か処を替たれど、尾花の波に浮める船のごとく思はる。

山にはさま〳〵の木多し、其山を越れば広き野に尾花打茂り、中には萩・藤ばかま・桔梗・われもこう・小車なんど所々に咲交れり。こは**秋風の池**の岸辺の原なり。またかの関より右の方へ行けば、冬咲く菊かず〳〵うえたるに水仙なども多し。其左は藤ばかまのみ多くうゑぬ。過ぎぬれば花圃多くありて、小亭衆芳の額秋田の君書給ふ。花は牡丹・芍薬・仙翁花・鶏頭・菊などさま〳〵植置きてけり。茲もいと広し。末の方は茄子・ささげなどもうゑたり。名所の木草の種歳々に茲にうゑて、生立頃は大塚が中どころの園に移すとか聞く。亭の北は黄なる花と唐国の柴のと吹上の浜の白菊とをわけて多く植ゑたるもおかし。亭を出れば花菖蒲いと多く植ゑたり。巾三間に長十一間なり。

夫を見つつ直ぐと行かば**千種の園**なり。園の左右は桃いと多く、さま〳〵の花さく錦の如し。茲にも蓮池あり。池の四方堤ありて、高潮の折潮水を入れじとの料なり。此池巾四間にて十八間なりといふ。**千種の園**は多く薬草など畝に植ゑたり。園の半より尾花の中を左に行けば、秋風の庭に出づ。**秋風の池**の波寄する岸なだらかにて、潮干の景色も珍し。茲を**湊田**といひて稲作りしが、潮水通へば終に今はやめて、湊田の浦わといふめり。尾花の中には松処々にありて、二・三尺許り囲む許りなり。吹上ノ浦・高砂・田子ノ浦・岸の姫松などことに大なる松なり。もとは紀州の太守手づから植給ひしを、三もとささやかなる盆に植えて賜ひしを茲に移したるが、三十余りかくはなりにけり。

山の上亭あり。秋風の額、広橋の儀同書れ給へり。亭上より池を見渡しぬ。尾花も時そえたるもおかし。此あたりの山は皆槀吾生茂りて、**口なし山**などいふ。亭の北の方小高き所、又小亭あり。山間なればにや、楽山の文字を掛たり。亭の後に露台あり。登ればかの桃を見、夏は蓮を見る。露台清香の額は東の方にかけ、凞春の額は西の方に掛たり。其亭を辞して**口なし山**を過れば、南は感応殿といふ額ありて観音を安置す。

山のただ間に橋掛けて其橋の下を行けば、楊柳池の方へ出るとなり。夫を隔てて堂あり。仰瞻の額あり。掛殿なり。其山に対して有るを**冠しの山**といふ。山の上亭あり、四時亭とかいふ。登りて見れば東の方は紅葉の木の間より**秋風の池**を看、南は花の木の間より**春風の池**を見、西は梅園の梢を**賜もの池**の岸なる松の上より見る。北は**賜もの山**の間なる**千代の細道**なり。**かざしの山**といふは、藤・桜・山吹・紅葉など有ればにや。二葉の葵もあれど夫のみにはいはじかし。額は巻物にして、画にて文字の姿をなす。春は梅桜の花にておのずから香風の文字をなし、夏は緑りの中の遅桜の花にて緑陰の文字を見せ、秋は紅葉の山水にて粋錦、冬は松の雪の積れるにて含光となす。実に此山の景色四の時にかなへりけり。

亭榭多けれど先言はば、**春風館**はむかし御殿なりし頃より伝はりしにて、其後焼にし後も夫に従ひて省きたれど姿を残す。花月衆芳はもと伝はりしを

引移したり。秋風は母上の小室を移し蓬瀛は翁が大任の頃西下といふ所にて作りし小楼を移せしなり。新に造りしは此亭のみなり。固より事そけたればおかしまふしも無きが上に日記にも書たる如くことに物を省きすてにけり。

此山の下に小池あり。茲は潮入らざれば、賜はりし蓮を植えしより**賜もの池**と名づく。さるを省きたまもといふはあやまりなれど、池に玉藻もつれづれしとて呼来りしとぞ。左右のかずかずの山をも**賜もの山**といふは、池よりうつし来りしなりけり。此**冠しの山**と**賜もの山**の間に阪あり。**御祓阪**といふ。こは春風の庭もおり過ぎて藤・山吹も散りぬる頃、賜もの卯木など咲出づるに、はちすの香りも涼しく木蔭多ければ、夏をことにもてはやす処なり。此阪を下れば桐の林ありて、夫を**初秋の森**といひて傍に柞なども立てり。されば夏と秋との行かふ阪なればかくやいひけん。昔茲にて御祓やしけん。なを問はまし。

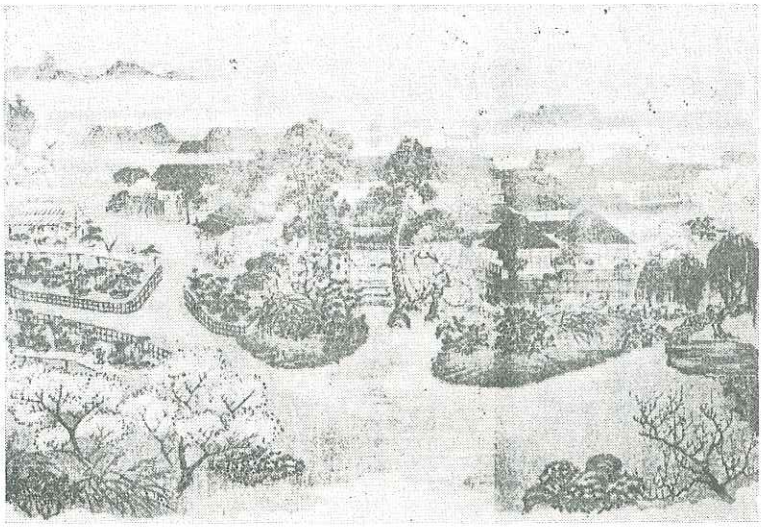
賜もの山の池につと出たる所に、楓に藤の掛りて下に瓦敷さたる処を**ゆかり廼屋**といふ。其山の坂を隔てて、寒山拾得の像のいと大なるを置く。女わらべなど、いとむくつけしなどいふ。此山の西の坂を下れば**色香の園**なり。始め盆梅など植たるが、今は名残もなふ生立てけり。又其坂をば下らず寒山の麓を行ば、左右の山々松のみ生茂りぬ。**千世の細道**とかいふとぞ聞ゆ。

其中を行過ば、蓮の池と**色香の園**なり。是より菓林とて、柿・梨・林檎、李などいと多く植し所を行て、又**色香の園**に出るなり。茲に小亭あり。琴雪堂といふ。堂の北の方に大なる松あり。園中第一番とよぶ。高さは一丈余りにて、東西四丈四尺、南北二丈五尺、四寸余の囲なり。臥竜の姿をなす松を琴とし、梅をきさらぎの雪として亭に名づけけん。松の傍にいと大きなる覇王樹と麒麟角あり。此地にては見しことなしとぞいふなる。是を合せて三奇園ともいふとかいふ。其覇王樹の後はいと打茂りて、椿・山茶花・木犀などいと多し。一位の君より賜はりし椿、三もと植たり。夫に添て竹もて造りし小亭あり。此茂りたる外は広き芝生にて早梅多く植ぬ。中央に有を立冬梅といふ。冬至などいふ類ならず。青葉ある中に咲出るなり。茲をなん**春知る里**といふは、早梅多くあればなりけり。

色香の園の南は**春風館**なり。額は加茂の甲斐の書けり。こは承明紫宸の御額かいたる書博士なり。此館南の簀子は池に臨めり。館の東の小室を楊柳亭といふ。此庭はかの**賜もの池**より続きたる小池にて、桜、柳交じれり。感応仰瞻の山を見る。いで此館は園中の高樹の第一なりといふ。南の方は**花の桟橋**、**桜が渕**を遥に見、南東は**しのゝめの浦**を見、西はかの**色香の園**より**有明の浦**、夫より**鳰の通路**などの島々を見るなり。釣好める男の子は、景色も見づて釣する有べし。**色香の園**の南館の西は**有明浦**といふ小島あり。さまざまの色あるものを植たれば**錦島**といふ。浦より石を躍りつつ行なり。茲を**鳰の通ひぢ**といふ。実に潮満ぬる時、跳行くべき石も見えずなん。

又茲に橋あり。**八聲の橋**といふ。橋を行ば**常盤島**といふに渡る。大なる蘇鉄のあればなり。又橋あり。**千代の長橋**といふ。渡れば小島ありて蘇鉄三もとばかり見ゆ。これをば**きは島**とかいふ。大なるのは大洲の長浜といふ所の亭にありしが、其亭廃して不用となれば贈り越したるなり。かきはのは房州又は、八丈のとかいへり。島よりもどりてかの園を行ば橋ありて、松濤深処の額掛たる門に入る。

○浴恩園全図は、岡本某が公の仙遊後に年来近侍せし事を、追慕の余に感徳



浴恩園千秋館之図　星野文良筆（瑞雨縮写）（『風俗画報』より）

る中に咲出るあり茲をかん春知る里といふは早梅多くあれがあ
りけり色香の園の南は春風館あり額は加茂の甲斐の書けりとは
承明紫宸の御額かいたる書博士あり此館南の簀子は池に臨めり
館の東の小室を楊柳亭といふ此庭はかの賜もの池より續きたる
小池にて櫻柳交じれり感懸仰瞻の山を見るいで此館は園中の高
榭の第一ありといふ南の方は花の樓橋櫻が淵を遙に見南東はし
のゝめの浦を見西はかの色香の園より有明の浦夫より爲の通路
あどの島々を見るあり釣好める男の子は景色を見づて釣するも
有べし色香の園の南館の西は有明浦といふ小島ありるまくの
色あるものを植たれば錦島といふ浦より石を躍りつゝ行あり茲

原文の一部（『風俗画報』より）

録八巻を著はして公の言行事蹟を詳記し、其参照に便する為に緻密なる着色図画を以て、家屋花囿より日常調度の物件・文房・武具の類に至るまで、凡そ公の創意に成れる者は悉く之を写生して、副冊副帖合せて五拾余巻を編述したる、其中の一帖なり。原図は大紙面ゆへ五十二勝の名所も書入れ、更に全図の略記を余白に掲けたれども、此縮図は紙面狹隘なるを以て、名勝の題名を記入すること能はず。仍て圏中イロハに文字を記して以て符号となし、原図の記文及び和漢両様の題名を左に併記すと云ふ。

酔園居士識

築地五丁目の武家地については、既刊の〝郷土室だより〟第6号に「工藤周庵の生活」を、第8号に「尾州と芸州の蔵屋敷」のことを書いている。

今回、松平越中守邸のことを記してなお、説明の洩れた武家屋敷が若干ある。それらの屋敷を解説しておこう。

現在「ガンセンター」や水路部のあるあたりは、江戸時代には「裏築地」あるいは「向築地」と称したらしい。

○増山河内守

「若年寄　二万石　つきじ　勢州長島」

（『文久三年武鑑』）

長島藩増山氏について『列藩要鑑』に

増山氏は三太郎正利を以て中興の祖となす。正保二年旗士に列し、弾正少弼と称す。後万石となり、侯籍に入る。元禄一六年勢州長島城に移封し、子孫世襲して正修に至る。明治二年三月正修卒し、子正目嗣ぐ、同六月長島藩知事に任ぜらる。

とある。ここ築地の中屋敷については『東京市史稿』市街篇に次の記録を載せる。

一、中屋敷　裏築地

唱替弘化二年一二月、相対替割替弘化二年一〇月二八日、坪数不詳。

嘉永以降各武鑑ニ載ス。

相対替屋敷書抜、弘化二年一二月二八日、村垣左太郎拝領屋敷、裏築地千五百廿坪之内九百六拾八坪余増山河内守え。屋敷境ニ付囲込、同人中屋敷同所弐拾六坪村垣左太郎え相対替。

○村垣季三郎

天保九年武鑑に「御台様御用人御広敷添番衆、つきじ三ノはし、村垣左太郎」と見える人は、季三郎の父であろうか。市史稿市街篇四一、六七六および六七八頁に

村垣左太郎拝領屋敷

木挽町築地千五百弐拾五坪余之内
九百六拾八坪余　増山河内守え。正修

増山河内守拝領屋敷

木挽町築地千弐拾九坪余之内
弐拾坪　村垣左太郎え
差引合五百七拾六坪余　高千二百石
村垣左太郎屋敷成

とある。

○多賀兵庫助

御使番衆　千石　つきじ　馬

（『天保九年武鑑』）

○大嶋右京

大嶋織部の祖義保は、慶安三年九月三日、西城御小姓組に列し、この日初めて家光に拝謁、この年一二月一一日父の遺跡美濃国加茂郡のうちにおいて五九〇石の地を与えられている。子義浮は、延宝元年七月一一日六才にして遺跡を継いで小普請入りをし、後新墾田を合せて六百石の知行取となった。

三代義陳（幸之助・伊織・織部・左兵衛、致仕号義道）四代義充と二代、嫡を迎えたが、延宝以来幕末まで数代一九〇余年にわたり、変ることなくこの地にあった。その地、現在の水路部の南端にあたり、閑静な、屋敷地として気に入っていたからであろう。